

## Ⅱ “教育山形「さんさん」プラン”の各施策について

### 1 各学校の実践事例

# 少人数学級編制 多様な児童への個別最適な学習のための指導と支援 酒田市立琢成小学校

## 1 本校の様子

本校は酒田市旧市街地の中心部に位置し、児童数 165 名、9 学級（特別支援学級 3）からなる小規模校である。複数の保育園からの入学者で学級が構成されるため、入学時には初対面の児童が多い。入学後は 6 年間同じ学級集団で過ごすため、関係の固定化等により、一部に人間関係の不安を抱える児童も見られる。

児童は概して人懐っこく、思いやりのある子どもが多い一方、学習意欲の低さや集中の継続が難しい児童、対人関係に悩む児童が一定数存在することが課題であった。こうした多様な実態の中で、担任 1 名でのきめ細かな指導や対応が難しい場面も見られた。

今年度は、第 5 学年が多人数単学級であり、少人数指導教員を活用して個別最適な学習のための支援を展開した。

## 2 実践

### (1) 運用の方針

#### ①基礎学力の確実な定着を図るための T T 指導の実施

国語・算数で理解度の個人差が大きい学年を中心に、複数学年で T T を導入し、児童個々の学習のつまずきに即応する体制を構築する。

#### ②上学年における教科指導（音楽・図工）

学年横断的な教科指導を行うことで、系統性を踏まえた授業構成や、児童の活動を連続的につなぐ指導を行う。

### (2) 具体的な取組み事例

#### ①児童の実態に応じた T T 指導による個別支援

##### 【5 年生を中心とした T 2 による支援】



- ・担任をメインティーチャーとし、T 2 が机間指導、個別支援、グループ支援を行った。
- ・一斉指導では把握しにくい細かなつまずきを早期に発見し、その場で支援することで、児童の「できた」「わかった」という実感を生み、学習意欲・自己肯定感の向上につながった。
- ・教師による適切な支援と学びのコーディネートにより、学級集団で目標を達成していく満足感が高まり、よりよい人間関係の形成にも寄与した。

#### 【他学年へのT2による個別支援】

- ・学習に取り組む際に不安やつまずきが見られる児童が在籍する学年にも適宜入り、個別の声かけや支援を実施した。
- ・「わかった」経験の積み重ねが、学級不適応の改善や学習への参加意欲の向上につながった。



#### 【学年横断的な教科指導】

- ・5、6年の音楽など、複数学年にまたがって指導することで、系統性を押さえた一貫性のある授業が可能となった。
- ・5年生児童は、6年生の学びの様子（活動・作品等）を見ることができ、次年度の学びを見通して取り組む姿が見られた。

#### ②担任との連携と負担軽減

- ・少人数指導教員が、学級経営に関連する業務の一部（プリント印刷、担任不在時の指導、個別支援、提出物点検など）を担当したことで、担任の負担軽減につながった。
- ・担任は児童理解や授業改善に向けた教材研究に、多くの時間を充てることができた。

#### ③多様な視点からの児童理解



- ・5年生女子は多感な時期であり、同性の教員が常に身近にいることで相談しやすい環境を整えることができた。
- ・安心して話せる存在がいることは、児童の心の安定や自己肯定感の向上につながった。
- ・得られた児童の情報や気付きは担任と共有し、チームとしてより効果的な個別支援を行うことができた。

### 3 成果（○）と課題（△）

○ 学級の実態に応じた柔軟な指導体制により、児童一人ひとりの学習状況や心理面を的確に把握し、効果的な支援が行えた。その結果、学習意欲が続かず取り組みが困難であった児童も、TT指導のもとで粘り強く学習する姿が見られるようになった。



○ 児童の不安や悩みがTT体制の中で共有され、チームとして丁寧に支援できたことで、児童一人ひとりに寄り添った対応が可能となった。継続的に適切に支援することで、人間関係の安定や、学級全体の落ち着きにつながった。

△ 一人の少人数指導教員の配置でも十分変容が見られたが、複数名の配置によって教科や学年を一層連携させた継続的な指導が可能となれば、さらなる教育効果が期待できる。

# 少人数学級編制 誰一人取り残さない個別支援の充実

尾花沢市立尾花沢中学校

## 1 本校の実態

本校は全校生徒数 241 名（1 学年 80 名、2 学年 71 名、3 学年 90 名）で、学級数は、各学年 3 学級、特別支援学級 3 学級（知的 1、情緒 1、病弱 1）の計 12 学級である。特に 1、2 年生は、少人数学級編制弾力化加配により 3 学級となっている。

市内の小学校 4 校から生徒が入学してくるが、うち 3 校は小規模校である。そのため、生徒の約 3 分の 1 が「少人数の学校生活の経験」をもった状態で本校に入学する。生徒、保護者ともに「多人数の学級に適応できるか」という不安を抱えている。

さらに、本校は来年度から福原中学校との統合を控えており、市内 1 校の中学校としての新たな体制づくりが必要となっている。こうした状況を踏まえ、本校では統合加配教員 1 名、市費による学習支援員 1 名、特別支援教育支援員 2 名を配置し、多人数学級であっても誰一人取り残さず個別支援を行う環境整備を進めてきた。

## 2 実践

### (1) 運用の方針

#### ① 数学・英語での個別支援体制の強化

- ・習熟度差が大きい数学と英語の学習において、全学年の授業で T T 指導を行う。
- ・数学科、英語科教員のほか、学習支援員や A L T も加わり、多面的な指導体制を組む。

#### ② 不適応生徒・不登校傾向生徒への学習支援

- ・様々な事情により学級に入れられない生徒のため、別室（リソースルーム）を校内に設置し、教員を計画的に配置。
- ・生徒がいつ登校しても学習できる環境を整え、生徒の安心感と学習継続を支える。

#### ③ 担任を主とした生徒と関わる時間の確保

- ・月 1 回「心のアンケート」を実施。
- ・担任は回答を丁寧に点検し、気になる生徒には速やかに十分な面談時間を確保。

### (2) 具体的な取組み事例

#### ① 個別の学習支援

##### 【T T による学習指導】

T 1 の教員が授業を進め、T 2 は机間指導を担当。学習課題に対してつまづいている生徒に対し支援する。また、個で取り組む練習問題やペアやグループで行う交流活動では、2 名体制の利点を生かし、生徒一人ひとりの実態に応じて適切な指導・助言を行った。さらに、英語では T 1・T 2 による英語での交流場面のモデルを示すことで、より充実した質の高い学びになるよう努めた。



### 【T2による個別指導】

数学において、小数・分数の計算、正負の数、文字と式などにつまずきの見られる生徒を取り出し、個別に丁寧な指導を実施した。生徒の実態に応じ、基礎内容に戻って丁寧に説明し、課題の解決を図った。



### ② 別室登校生徒への学習支援

現在、別室登校生徒は、2年生5名、3年生1名。登校時刻や滞在時間が毎日異なるため、担当教員を計画的に時間割へ組み込み、必ず誰かが対応できる体制を整えた。また、担任・教科担任と別室の担当教員が密に連携し、

- ・取り組むべき学習内容
- ・伝えるべき配慮事項

を共有して、生徒一人ひとりに応じた支援を行った。



### ③ 生徒と関わる時間の確保

毎月初めの「心のアンケート」は、生徒理解を深めることやいじめなどの問題行動等の早期発見を目的として実施した。アンケート後は、昼休みや放課後などに生徒一人ひとりと十分な時間を確保し、困りごとや悩みごとなどについて話を聞き、適切な対応ができた。

## 3 成果（○）と課題（△）

### ○ 授業理解・技能の習得

- ・12月に行った学校評価では、「授業の分かりやすさ」や「技能の習得」に関する項目で、肯定的回答が89%に達した。複数教員体制で個別の学習支援を行っている成果と捉えている。

### ○ 不適応生徒・不登校生徒の減少

- ・3年生の別室登校生徒1名は、1学期はほとんど別室で学習していたが、2学期中盤からは多くの教科を教室で受けられるようになった。
- ・2年生の4名も学習への自信が高まり、前向きな姿が増加。うち2名は教室で受ける授業が増加した。

### ○ 学校生活における高い満足感や速やかないじめ対応

- ・6月の調査で18件のいじめを認知。11月調査は11件であり、計29件である。そのうち19件が解消。解消に向けて取り組んでいる残り10件も、現在はいずれも行跡が見られない状況となっている。
- ・12月実施の学校評価では、「学校生活が楽しい」項目が肯定的回答96%であった。
- ・少人数学級編制により、担任が生徒の様子を丁寧に見届けることを通じて生徒理解に努め、気になるときは速やかに十分な時間をとって対応していることが、いじめ解消や充実した学校生活につながっている。

### △ 教員の負担増

- ・少人数学級編制による大きな成果が得られた一方で、教員の時間的な負担が増加した。支援体制の整理など、より効果的な支援体制の在り方の検証が必要である。

# 特別支援学級 学級編制基準の引き下げ 少人数を生かした、個に応じた指導の充実

最上町立向町小学校

## 1 本校の実態

本校は児童数 203 名、通常学級が 8 学級、特別支援学級が 4 学級（知的 2、情緒 1、病弱 1）からなる計 12 学級である。

知的学級は、昨年度まで 3 学年複式の 1 学級だったが、今年度、特別支援学級編制基準引き下げにより、単式学級 1（2 名）と複式学級 1（5 名）の 2 学級体制へと変わった。

昨年度の 3 学年複式のよさを生かした縦割り活動は継続しつつ、教科や自立活動については、個に応じたきめ細かな指導ができる環境を十分に生かすことをねらいとした。

## 2 実践

### (1) 運用の方針

- ① 児童の心身の調和的発達を支える自立活動の充実  
少人数のよさを生かし、児童の特性や発達段階に応じて支援内容を調整しながら、個に応じた自立活動を行う。
- ② 主体的に学習に取り組む態度を育むためのきめ細かな学習指導  
学習内容の精選、興味・関心の活用、小さなステップを踏んだ個別最適な学習を通し、少人数だからこそ可能な丁寧な支援を行う。

### (2) 具体的な取組み事例

#### ① 個に応じた自立活動の工夫

教師に自分の思いを伝えたり、教師の働きかけに応じたりすることができるように、身振りや絵カードを使って意思を伝える。

絵カードは、リングに通していつでもすぐに手にできるようにしている。

【絵カードの例】

当初は、言葉のオウム返しの段階だったが、

- ・身振りや絵カードで自分の気持ちを伝える
- ・絵カードの言葉を自分の声で伝える
- ・相手の言葉の意味を理解して行動する

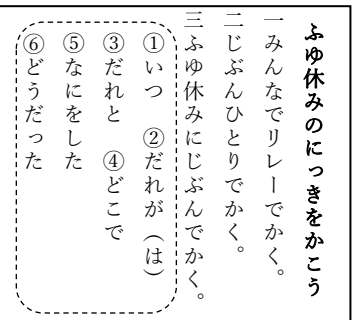
という段階を踏んで、徐々にコミュニケーション力が育っている。



自信をもって課題に取り組むことができるように、手順を細分して視覚化したり、活動を振り返ってできたことやがんばったことを確認したりする。

取り組む学習や作業について細分した手順をホワイトボードや個別のシートに示して見通しをもって活動することができるようにしている。（右の図）

進捗状況が視覚的に確かめられ、安心して活動し主体的に学習に取り組む態度が育ってきている。この経験の積み重ねと仲間との活動を認め合う場の設定により、自己肯定感が向上し、自分の気持ちを言葉で表現できるようになってきている。



物を認知する力を高めることができるように、物を注視したり、見本を見て書き写したりする。

I C Tによる認知機能トレーニングを行っている。

短時間の集中力の持続でトレーニングが可能のため、紙ベースで行っていた時よりも達成感が得やすく、自ら意欲的に取り組んでいる。加えて、個に応じて自作のプリントも併用している。正確に書き写す力の伸びを児童が実感したり、教師が見取ったりする上でも効果がある。また、I C T機器の操作という点でも成長している。



## ② きめ細かな学習指導の充実

分数の計算力を向上させるために、学年を遡ってつまづいている個所を丁寧に復習し、個に応じたスモールステップで学習を進める。

分数の計算では、児童のつまづきの主な原因を分析し、通分と約分の復習を繰り返し集中的に行った。

簡単な計算のミニプリント⇒複雑な計算が入ったプリント⇒月例テスト（交流学級と同じプリント）というように、個に応じたスモールステップを踏んで学習に取り組んだ。

月例テストに合格したことで自信が付き、算数の他領域や他教科の学習意欲も向上している。



漢字を読み書きする力の向上のために、目標を立てて自らI C T機器を活用して学習する。

漢字の習得は個人差が大きく、特に「書き」は苦手意識が高い。繰り返しノートに書いてもなかなか定着せず、あきらめてしまいがちであった。

そこで、自分のペースでI C T機器を使って楽しみながら漢字ドリルに取り組めるようにした。児童は漢字の学習に興味をもって取り組むようになり、少しずつ苦手意識が薄れ、少し頑張れば達成できそうな目標を立てて漢字の習得に挑戦し続けている。



## 3 成果（○）と課題（△）

- 一人ひとりの取り組み状況を把握し、支援を調整しながら個に応じた自立活動を十分に実践することができている。そのことが、児童の自立への確実な歩みとなっている。
- 特に単式学級の児童については、複式学級の時よりも通常学級との交流や学年全体の活動の中で適時にきめ細かな支援をすることができ、人間関係の形成に効果がある。
- 上学年の複式学級では、I C T機器も活用して主体的に自分でペースをつくりながら目標をもって学習する態度が定着してきている。
- △ 少人数学級編制のメリットを生かした特別支援学級どうしの交流、複式を解消した学習活動の在り方をさらに工夫していく必要がある。
- △ 通常学級在籍児童と特別支援学級在籍児童の協働的な学びの場の設定の仕方をさらに工夫していく必要がある。

**小学校低学年副担任制**  
**多人数学級における細やかで寄り添った児童支援**  
**高畠町立糠野目小学校**

## 1 本校の実態

糠野目地区は米沢盆地の東部に位置し、最上川（松川）と鬼面川、和田川べりに位置している。米沢と南陽の中間地点で、国道13号線沿いという地の利から企業誘致が進み、高度成長期以降に移住した世帯も多い地域である。

本校は、町内でも児童数が比較的多く、全校児童297名、13学級（特別支援学級2）である。転入や区域外就学も複数あり、年度途中には300名に達した。各学年2学級編成であるが、近年の児童数減少により、令和7年度入学生から単学級となった。

現1年生は、当初34名（特別支援学級在籍1名を除く）でスタートしたが、転入1名、区域外就学児1名が加わり、秋には36名となった。家庭背景も多様で、個別の支援を要する児童が多い学級である。そのため、今年度は小学校低学年副担任制による非常勤講師の配置を受け、多人数学級でもきめ細かな支援ができる体制を整えている。

## 2 実践

### (1) 運用の方針

- ① 児童が早く学校に慣れ、安心して活動できる環境づくり  
授業を中心に学校生活全般を手厚く支え、安心感と安定した生活リズムの確立を図る。
- ② 複数の視点による児童理解の充実と温かな学級経営の実現  
担任と副担任が日常的に児童の様子を共有し、児童の状況に応じた声かけや励ましを行い、豊かな人間関係づくりにつなげる。
- ③ 児童の学習状況を丁寧に把握し、個に応じた支援を実施  
内容や単元によって2つに分かれて学習したり、個別に支援したりしながら基礎学力の定着を図る。
- ④ 担任業務の分担による負担軽減と授業の質の向上  
副担任が学級事務を中心に担い、担任は授業準備や児童指導に集中できる体制を整える。

### (2) 具体的な取り組み事例

- ① 複数体制による教科指導と個別支援の充実  
副担任の配置により、日常的に複数体制で教科学習を行うことができる環境は、児童の学習意欲を高め、学習内容を定着させるために非常に効果的である。  
担任が授業を進行しながら、副担任が指示の理解に時間を要する児童や、学習内容に不安やつまずきが見られる児童に応じた個別支援を行うことができ、児童の学びをサポートすることができた。



## ② 多様な学習活動の展開

学習内容や単元によっては、児童の習熟に合わせた学習活動が効果的な場合がある。算数の学習では、1年生教室と隣の学習室を活用し、担任と副担任に分かれて児童の習熟に合わせた少人数指導を行った。実情に合わせた細やかな指導を行うことで、学習内容の理解が深まり、達成感や満足感を味わうことにつながった。

また、生活科や図工、音楽等、活動スペースを要する学習では、担任と副担任が役割分担し、安全に配慮した学習活動を行うことができた。多人数学級でも活動の質を落とすことなく、多様で効果的な学習活動を展開することができた。

## ③ 情報の共有と児童理解の深化

学級経営の基本は児童理解であるという認識を共有し、児童一人ひとりを理解し、温かな声かけや励ましを行うことを大切にした。担任と副担任が日常的に児童の様子を観察することで、児童の小さな変化や不安に早期に気付くことができた。

必要に応じて手分けして話を聞くなど柔軟に対応し、共有した情報をもとに適切な支援を行うことで、児童が安心して過ごせる温かな学級経営につながった。

## ④ 担任業務の分担による負担軽減

提出物の確認、宿題・ノート点検、テストやプリント等の丸付け、学習用具準備、印刷などの学級事務を副担任が担うことで、担任は授業準備や児童と向き合う時間を確保できた。

また、低学年で負担の大きい給食・清掃指導も分担し、効果的な生活指導と安全確保を実現した。

## ⑤ 保護者の安心感につながる

担任と副担任の児童観察により、日常の学校での様子を細やかに保護者に伝えることができた。入学当初、1年生で多人数学級という状況を心配する保護者の声があったが、副担任が常時児童の活動を支援してくれるという体制により、大きな安心感につながっている。

## 3 成果（○）と課題（△）

- 副担任が配置されたことで、学習指導や生徒指導の両面で、児童一人ひとりの思いに寄り添う支援が可能になり、学校生活を送る上での児童の安心感につながった。
- 細やかな声かけを随時行うことにより、児童が自信をもって学習に取り組む姿が増え、次の学びへの意欲向上につながった。
- 学級事務を副担任が担うことで、担任は時間的余裕ができているとともに、授業の準備や児童と向き合う時間や分掌業務の時間を確保することができた。
- 担任と副担任の複数の目で、児童を見守り支援する体制により、保護者の安心感に大きくつながった。
- △ 非常勤講師であるため、勤務時間の制約により、学級事務の業務や担任との打合せ時間が限られている。

**中学校別室学習指導教員**  
**安心して学習ができるもう一つの居場所づくり**  
**鶴岡市立鶴岡第一中学校**

## 1 本校の実態

本校は生徒数 502 名（1 年生 150 名、2 年生 194 名、3 年生 158 名）、21 学級（普通学級 16・特別支援学級 5）からなる、鶴岡市内で最も生徒数の多い学校である。

5 つの小学校から生徒が進学してくるが、出身小学校ごとの人数構成のバランスが学級によって大きく異なり、新たな環境での人間関係づくりに戸惑う生徒も少なくない。

また、個別の教育支援計画を必要とする生徒も多く、教室に入れない生徒、不登校傾向の生徒、様々な困難を抱える生徒など、多面的な支援を必要とするケースが数多くみられる。

このような状況を踏まえ、本校では別室学習指導教員を配置し、学校全体で別室（相談室）を運営する体制を整えている。

## 2 実践

### (1) 運用の方針

#### ① 安心して学習できる居場所づくりの推進

特別支援コーディネーターを中心に、学年主任・学級担任・教科担任・養護教諭が連携し、学習指導や生活指導、教育相談などを行うことで、生徒が安心して過ごせる別室環境を整える。

#### ② 生徒一人ひとりのペースに合った学習支援の工夫

学習場所や学習方法の選択肢を広げ、生徒が自分に合った形で意欲的に学習に取り組める体制を構築する。

### (2) 具体的な取組み事例

#### ① 安心して学習できる居場所作りの工夫

- ・相談室（別室学習指導）では、自主学習を中心に学習を進め、利用生徒全員が同じ場所で学習している。個別に取り出し学習を希望、ICT機器を使用した学習指導、教育相談への対応など、多様なニーズに応じられるよう3か所ある相談室を有効活用した。
- ・時間割は、基本的に在籍学級の時間割に合わせて決め、一人ひとりの一日の学習予定を表示させ、何をどこまで学習するか考えさせて目標をもって学習に取り組めるようにした。
- ・希望する生徒に対して、リモートで在籍学級の授業に参加できるようにしたことで、別室でも学習内容の理解を深めることにつながった。
- ・心身の状態に応じて、通常学級在籍生徒も一時的に相談室を利用できるよう、担任と連携して受け入れ体制を整備した。
- ・学習以外で「不安を感じること」「困りごと」などについての相談場所としても活用している。
- ・理科の実験を希望する生徒には、人数の少ない特別支援学級での実験参加を調整するなど、教科担任との連携によって学習機会を保障した。
- ・在籍学級の授業に参加希望する生徒に対して、教科担任と連携して座席の配慮や学習内容の確認を行い、参加しやすいようにした。

- ・集会や学校行事に参加・見学できるように、居場所を工夫して前もって生徒に説明したことで安心して参加できた。

## ② 指導にあたっての学習面での工夫

- ・学習進度を合わせるため、各教科担任に学習進度予定表を作成してもらい、相談室に掲示して、単元テストや定期テストなどに合わせて計画的に学習が進められるようにしている。学習進度に気を配りながら、必要に応じて指導・支援している。
- ・プリント類は職員室内に個人ファイルを用意し、担任・教科担任が確実に入れられる仕組みを整えた。生徒は、登校後職員室に寄り挨拶してから、個人ファイルを確認して受け取る。
- ・相談室用の教師用教科書を準備し、教科担任との打ち合わせを基に個別学習指導をしている。また、学習プリントを教科担任が添削することで、生徒の学習意欲を高める仕組みを整えた。

## ③ 全職員と連携した組織的な指導体制

- ・特別支援コーディネーターを中心に、別室学習指導員、学校教育支援員2名と相談室経営を行っている。相談室の指導方針や使用方法、生徒への対応などについて、全職員と共通理解を図り、学校全体としての組織的な支援体制を確立した。そのため生徒一人ひとりに合ったきめ細かな指導ができています。
- ・相談室での生活の様子は日誌で当日中に回覧している。生徒が直接訴えてきたことや気になったこと等は、直ちに学級担任等に伝えて生徒への適切な指導を行っている。学級担任等からも指導の内容を伝えてもらい常に情報共有している。
- ・学級担任は、生徒が登校すると相談室へ足を運んで声をかけることで、在籍学級への所属感を持てるように支えた。
- ・生徒一人ひとりの指導や支援の仕方など、特別支援コーディネーターを中心に学年主任・担任から方向性を示してもらい、一貫した指導を行った。

## 3 成果（○）と課題（△）

○ 全職員で連携して指導に取り組む体制が確立しているので、様々な理由で相談室を利用する生徒に対して、別室学習指導員は学習を中心に指導できた。また、別室学習指導員は、生徒と担任・教科担任の橋渡し役としての機能も果たし、適切な指導につながった。

○ 生徒の登下校時刻、利用方法が様々だが、相談室に関わる教職員の3名配置と3か所の使用教室により、学習方法の工夫や学習の場の設定ができ、生徒一人ひとりに対してきめ細かな指導ができた。そのため生徒も安心して集中して学習に取り組む姿が見られ、自信や充実感の獲得、学習意欲の向上につながった。

△ 別室は不登校・不登校傾向生徒にとって必要不可欠な居場所である一方、協働的な学びや集団での取り組みを経験する機会が少なくなるという課題がある。

△ 在籍学級への段階的復帰を進めているものの、生徒の実態に応じた関わりの難易度が高く、支援方法のさらなる工夫が求められる。

# 教科担任マイスター制度 小学校教科担任マイスター

## 校内における教科担任制と校内研修の推進

新庄市立新庄小学校

### 1 本校の実態

本校は児童 311 名、全学年 2 学級、特別支援学級 8 学級、計 20 学級の中規模校である。「素直で明るく思いやりのある子」「よく考えて進んで勉強する子」「がんばりぬくたくましい子」を学校教育目標としている。校内研究では「自律的に学ぶ子どもの育成」を主題に、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させる授業づくりを進めている。中央教育審議会答申では、児童一人ひとりを主語にする教育や、教師が探究心を持ち続ける「伴走者」としての姿が示され、教師の学びは児童の学びと“相似形”であるとされている。この観点から、校内研修でも教師自らが問いを立て、実践と振り返りを重ねながら協働して学びをデザインする探究的な在り方を重視し、教科担任マイスターとして本主題を設定し、実践を積み重ねてきた。

### 2 実践

#### (1) 運用の方針

- ① 教科担任制の校内推進の中核としてのマイスターの活用  
教科担任マイスターが中心となり、より専門性を生かした授業づくりを行い、児童の主体的な学びを支える授業改善を進める。
- ② 研究主任との協働による校内研修の質向上  
校内研修のテーマと教科担任マイスター制度を連動させ、教科の本質に迫る協働的な授業改善を推進する。
- ③ マイスターによる学年横断的な授業支援  
マイスターが他学年の授業を担当したり、T1やT2として参画したりすることで、系統性を踏まえた指導と日常的なOJTを充実させ、教員間の指導力向上につなげる。

#### (2) 具体的な取組み事例

- ① 校内の教科担任制の推進  
本校は、学級担任としてという考えより学年団として児童を育てることを意識し、2 学年より教科担任制を実施した(図1)。その際、OJT支援員や専科教員、教務主任等の担任外の教員による指導も組み合わせた。

教科等	国語	書写	社会	算数	理科	音楽	図工	家庭	体育	道徳	総合	学活	外国語
6年1組 (担任:A)	A	O	A	マ	担外	担外	A	O	担外	O	A	A	K
6年2組 (担任:マ)		支						支		支	マ	マ	

図1 第6学年の各教科の指導者

また、教員の得意教科を生かすために、マイスターが2年生1クラスの算数を担当し、そのクラス担任が6年生の外国語を担当するなど、学年やブロックの垣根を越えた指導体制に取り組んだ。

- ② 校内研修との連携

教科担任制を推進するにあたり、今年度は「国語」と「算数」に重点を置いた校内研究に取り組んでいる。各学年の担任団が「国語」と「算数」のチームに分かれ、研究主任が国語、教科担任マイスターが算数の主任となり、取り組んでいる。全体での研修はもちろんだが、その他に教科ごとにおける研修、指導案検討会も実施した。日常的に教科の本質に迫る授業づくりを考えながら、児童の姿で相談する雰囲気醸成されてきたことで、授業者一人で抱える負担が軽減した。



写真1 全体での研修の様子



写真2 2年生での授業の様子

### ③ 教科担任マイスターの活用

今年度、教科担任マイスターは、6年生の担任である。しかし、年度当初から2年生1学級の算数の授業を行ったり、1～5年生の算数の授業にT1やT2として参加したりしている(写真2)。そのため、日常的に授業を参観し、児童の姿を見て授業づくりについて話し合う機会が授業研究会以外の時間でも生まれた。授業研究会以外にも日常的に授業をしたり、参観したりすることで、日常から授業づくりについて話し合う機会が増えた(写真3)。学年の系統性を意識した授業を普段から受けている6年生の児童に話を聞いてみると、体積の求積の学習の時に、4年生の学習(面積の求積方法)の確認を導入部分で行ったことで、「見通しをもって考えることができた。」と述べていた。また、既習事項に触れながら学習を進めていくことで、「以前は分からなかったけれど、分かるようになった。」「前まで疑問に思っていたことを今年は先生に質問することができた。」という声も聞かれた。また、児童による他の学年の授業の様子を参観してもらう機会も設定(写真4)することで、算数科における学び方の意識の変化が生まれた(写真5、6)。その後の授業の児童の様子を5年生の算数科担当K教諭は、「中間層の子が自分の考えを伝えようとする姿が増えてきた。」「算数が苦手な子も他の人に頼ってもよいのだと理解し、友達に聞きにいこうとする人が増えてきた。」と述べていた。



写真3 授業づくりについての話し合い



写真4 他の学年の参観の様子

6年生の姿で「すごい」「こうなりたい」「これならできる」と感じた楽しい雰囲気でもみんなしっかり書いてたし、しっかりできていた。いったみんなしっかり書いていたし、先生の話を目を見て聞いていたところが良かったです。きこ「なんでそうなったの」という疑問に一齐に答えることができ→集中力がある・切り替えがすぐできる<sup>たがはる</sup>

グループでの活動で男子だけ女子だけでもなくみんなで話し合うことができていた◎

# 1班

写真5 5年生の振り返り①

○先生の問いかけに対する反応◎  
→「少し考えてみて」に対して、すぐに自分の考えを書くことができていたから？  
自信をもって発言や、黒板に書くことができるのかな？

○「ねえねえ、どうなった？」のような、関わり方が◎  
→「どうして？」という疑問をしっかりともつこと、疑問を解決しようとする気持ちが伝わってきた。

○1人でもくもくと取り組む姿も◎  
→誰とも話せないから...ではなく、「まずは、自分で！」という意思が伝わってきた。  
しっかり、授業の雰囲気に入っていた。

○グループ学習での女子の表情や取り組み方？がいい。  
→「お客様(教えてもらえるからいいや)」がない。

写真6 5年生の振り返り②

### 3 成果(○)と課題(△)

- 教科担任制により、教員が得意分野を生かした授業ができるようになり、児童の理解が深まった。(例) 2年担任が6年外国語を担当。マイスターが2年算数を担当。
- 教科担任マイスターが配置されることで、学年間における系統性を意識した指導を行うことができた。日常的な授業づくりについての話し合いも行うことができた。
- 6年生の児童からは、「先生によって授業が変わるので切り替えがしやすい。」「質問したら、分かりやすく教えてもらえることが増えた。」など、教科担任制効果が実感されている。
- △ 学年を越えて教科を担当するため、時数調整や担外教員との協力が欠かせない。組織全体としての調整が必となる。

# 教科担任マイスター制度 小学校教科担任マイスター I C Tの効果的な活用と伴走的な教師の関わりを通じた授業改善 川西町立小松小学校

## 1 本校の実態

本校は児童 231 名、13 学級（特別支援学級 2）、教職員 34 名の中規模校である。学校教育目標として「命・心・体を大切に子ども」「自ら学びを深める子ども」「仲間を大切に子ども」「郷土を愛する子ども」を掲げている。

校内研究では「伝え合うことで学びを深める子どもの育成」を主題に、「①伝え合うことを楽しもうとする子ども」「②伝え合うことを通して、共に思考し、自分の学びの深まりを実感することができる子ども」を目指した授業づくり、授業改善を核とした教育活動にあたっている。

本校児童の実態としては、基礎的学力はあるものの、既習事項を生かして応用問題に取り組む力が十分でないこと、考えを交流する場面で「言って終わり、聞いて終わり」になる児童が多いことが挙げられる。そこで今年度は、教科担任マイスターを中心に、「I C Tを効果的に活用しながら既習事項生かして学びを深めていく子ども」「相手意識をもって聞いたり話したりし、対話によって問題を解決する子ども」を育成するために、次の3視点で教材研究を行った。①子ども同士の対話がある授業 ②振り返りが生きる授業 ③I C Tが効果的に使える領域や単元を検証する。

上記を実践し、随時方法等について学校全体に共有し、教員の授業力向上を図った。

## 2 実践

### (1) 運用の方針

- ① 教科担任マイスターを研究主任として活用し、校内全体の授業力向上を牽引する  
I C Tを効果的に活用した授業実践、研究会の情報発信を積極的に行い、「教材研究」「I C T活用」「情報発信」の3チームを組織して学校全体でマイスター業務を推進する。
- ② 児童主体の学びを実現するための単元内自由進度学習の実施  
教師がファシリテーターとして児童の学びを支える授業へと転換を図る。
- ③ 教科担任制による教科の専門性を生かした授業改善を進める  
複数の教員の視点で児童を見取り、児童理解に基づいた授業を展開する。

### (2) 具体的な取組み事例

#### ① 集中的な教材研究とI C Tの効果的活用

国語・算数を中心に、ロイロノートや教科書二次元コードを活用した授業実践を行った。教材研究担当とI C T担当が連携し、以下を進めた。

- ・I C Tが特に効果を発揮する領域・単元の検証
- ・効果的なロイロノートの活用方法

教員同士で、悩みを共有したり、今後の実践について相談したりする中で、教材研究をより深く行うことにつながった。今後、これらの研究により作成した教材等を蓄積し、共有できる教材を増やしていく予定である。



写真1 図形に線を書き込む。デジタルだと全員の考えを一斉に見ることができる。

また、ICT担当教員がミニ研修会を開き、教材研究の手立てとなるような実践の紹介等の取組みを共有した。ICT支援員の協力も得て、ロイロノートの使い方や、授業で使える機能を教えてもらうことで、教材研究を進めることができた。

### ② 伴走的な教師の関わりによる授業改善

教科担任マイスターが5年算数を持ち、TTの支援体制を柔軟に取り入れ、児童主体となるような授業づくりを進めてきた。一斉学習の中では、自分の考えをクラウド上にアップし、共有することで他者参照できるようにした。その中で、児童同士の対話が生まれるように児童をつないだり、児童の考えを促したり、教師がファシリテーター的な役割を担い、授業を進めた。教師が教えるよりも、児童同士で問題を解決することで、授業に向かう姿勢が前向きになり、意欲が増したように感じている。実際に、「ICT機器を活用することで、友達と考えを共有したり比べやすくなったりしたか。」というアンケートでは、全員が「やりやすくなった」と回答している。

また、学期に1回、算数で単元内自由進度学習に取り組み、自分のペースで学びを進めることができるようにした。基本は、ロイロノートと教科書とノートを使い学習を進めた。自分のペースで学習を進められることで、「もっと解けるようになりたい」「頑張りたい」と思う児童が増えた。教師主導の学習スタイルと比べて、児童は、授業を自分事として考えるようになり、「解決したい」「解けるようになりたい」という思いを強くもって、意欲的に取り組むことができていた。

これらの取組みや授業実践、研修会の情報について、教職員に情報を提供するためにマイスターだよりを発行した。また、情報発信担当が校外に情報発信を行った。

### ③ 教科担任制による児童理解と授業改善

教師同士の会話の中で、クラスの実態や気になる児童の様子について共有し、指導や対応につなげることができた。担任が授業をしている時には見ることのできない児童の様子を、教科担任に気付いてもらうことができるので、生徒指導の面でも授業改善の面でも、ありがたさを感じている。



写真2 友達の考えを聞いて、考え直している様子。



写真3 ICTを活用した単元内自由進度学習の様子。

## 3 成果（○）と課題（△）

- 子ども同士の対話がある授業、振り返りが生きる授業、ICTが効果的に使える領域や単元を検証することを柱とした教科担任マイスターの取組みを通して、授業改善を進めることができた。マイスター自身の授業観も変わった。今後も、さらなる授業改善に向けて、取組みを続けていきたい。
- 教科担任マイスターが研究主任を兼ねることで、校内研究全体の活性化につながり、マイスター個人を含めた様々な実践や研修会の報告の情報共有がやりやすかった。
- △ マイスター業務に3つのチーム（教材研究、ICT活用、情報発信）で取り組んだが、個々に活動することが多くなってしまい、全員で集まって話し合いの場を設けることが難しかった。持続可能にしていくための方法を考えていく必要がある。

# 教科担任マイスター制度 中学校教科担任マイスター 見える学力を高めるための系統的な学びを意識した 小中連携の推進とICTの活用

大石田町立大石田中学校

## 1 本校の実態

本校は全校生徒 118 名、特別支援学級 2 学級を含む 5 学級の大石田町内唯一の中学校である。学校教育目標「夢をいだき、生き生きと輝く生徒の育成」のもと、「合意形成を通して、学びの質を高める生徒の育成」を研究主題として実践を重ねている。

令和 9 年度には町内の小学校が統合され、新生大石田小学校と本校が併設型小中一貫校としてスタートする予定である。私たちにとって小中連携は必須の課題である。本校の課題として、次の 3 点が挙げられる。

- ・教職員の年齢差が大きい中で、経験年数の浅い教員が増えている。若手教員の学ぶ機会の確保のためにも、日常的な O J T の活性化が必要である。
- ・併設型小中一貫校の要として、学びにおける小中連携の姿を構築したい。小中の系統的な学びを意識した授業づくりが必要である。
- ・全国学調や N R T の結果から「見える学力」の向上が必須の課題である。学習で効果的に ICT を活用し、協働的な学びと個別最適な学びの一体化を充実させ、学びの質を高める必要がある。

## 2 実践

### (1) 運用の方針

#### ① 授業力の向上

- ・小学校の学習を土台とした 3 年間の系統性を意識した授業づくりの促進
- ・個に応じた授業形態の工夫と ICT 活用の推進
- ・マイスターのリーダーシップによる学校全体の授業改善・学び合う文化の醸成

#### ② 小中連携の推進

- ・マイスターによる小学校訪問・T T 指導・授業づくりの助言
- ・「マイスター便り」による小中双方の授業実践紹介
- ・小学校の校内授業研究への参加と分科会での意見交流
- ・小学校 3 校合同「サンサンスタディ」での授業実践
- ・中学校のフリー参観日を設け、小学校教職員に授業を積極的に公開
- ・校内掲示物などを通して、小中の学びの接続を可視化する取組み

### (2) 具体的な取組み事例

#### ①-1 小学校用の教科書を職員室に配置

職員室に小学校用の教科書を配置し、小学校の学びをすぐに確認できる環境づくりを行い、小学校での学びへの意識を高めた。



#### ①-2 授業 Share シートの活用

お互いに授業を見合う習慣をつくるため、授業を見たら簡単に感じたことを書いてメッセージを送る活動を行った。

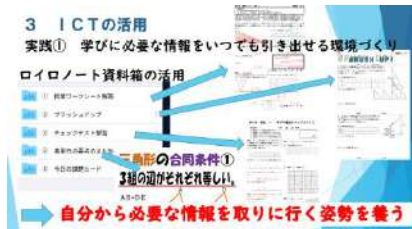
お互いの授業を見合うことにより、よさや課題について共有することができ、授業力向上の一助となった。



### ①-3 自由進度学習や習熟度学習を効果的にするICTの活用

#### ①自由進度学習

3年「2次方程式」等で実施。ロイロノートの資料箱を活用し、応用問題や確認テスト、既習事項の要点など、必要な情報を必要に応じて引き出せる環境を作った。



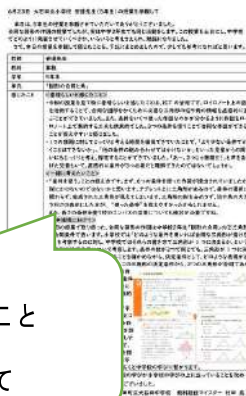
#### ②習熟度学習

3年「平方根」等で実施。ロイロノートの提出箱で生徒のワークシートを共有することで、様々な考えとの出会いが円滑になり、学び合いが活発化した。



#### ②-1 小学校を訪問し、TT指導や授業づくりについての助言

月に1~2回程度、小学校を訪問し、算数の授業を中心にTT指導を行ったり、授業を見て感じたことを授業者の先生と共有したりした。小中学校での授業の繋がりや小学校のゴールの姿について考えを共有した。



- <アドバイスシート>
- ①素晴らしいと感じたこと
  - ②一緒に考えたいこと
  - ③系統的な学びについて

#### ②-2 サンサスタディ(小学校3校合同授業)で授業

大石田小学校を会場に、小学校統合に向けた合同授業で、ゲームを取り入れながら、「正負の数の計算」の授業を行った。

小学校の先生と連携して授業を行うことで、小学校の学びが中学校に繋がることをより意識づけすることができた。



小学校教員がTTに入り、中学校教員と一緒に数学の授業を行った。

#### ②-3 フリー参観日を設け、中学校の授業を積極的に小学校に公開

小中学校で連携し、授業づくりについて相談しやすい体制を整えるためにも、まずはお互いの授業を見合う機会を設けた。

中学校の数学の授業を公開。地区内小学校、教育委員会から参観者が訪れ、授業後、交流会を行った。



#### ②-4 掲示物でも学びの繋がりを意識

階段の踊り場や廊下の掲示板に、各教科の掲示スペースを設け、小学校の学習内容や中学校での既習内容について、知的好奇心を刺激するような掲示を行った。



### 3 成果(○)と課題(△)

- 多様な取組みを通じて、小中学校双方が「学びの系統性」を意識する機会を増やし、地区としての小中連携の意識が高まった。
- 小学校教員とのつながりが強まり、来年度以降、併設型小中一貫校へ向けた連携が一層進む見通しが得られた。
- △ 教科の系統性に加え、学習規律や家庭学習等の連携も小・中の教員が協働していく必要がある。